

旦那様は妻の私より
幼馴染の方が
大切なようです

◆ ————— ◆
雨野六月
Mutsuki Uno

Regina
BUNKO

Character

登場人物紹介

セシリア

本作の主人公。
婚約者であるラルフに嫁ぐが、
なにかにつけて幼馴染を優先する
夫ラルフに愛想を尽かし
離婚を決意する。

アイザック

セシリアの幼馴染で将来有望な
宰相付きの若手事務官。
一時期、セシリアと距離を
置いていたようだが……？

アンジェラ

ラルフの幼馴染で
ガーランド侯爵家の居候。
本人いわく病弱で侯爵家の
使用人を味方につけている。

ジェームス

ラルフ付きの有能な執事。
侯爵家の財政がセシリアの
実家・サザーランド伯爵家に
依存していることを
唯一理解している。

ラルフ

セシリアの夫で
ガーランド侯爵家当主。
同居する幼馴染・アンジェラ
ばかりを気にかけ、
セシリアを悩ませる。

マーサ

アンジェラを溺愛している
ガーランド侯爵家の女中頭。
嫁いできたセシリアを虐げる。
可愛いものに目がない。

目次

旦那様は妻の私より幼馴染の方が大切なようです	7
番外編	
貴方とならば	305
書き下ろし番外編	
アイザック・スタンレーの恋	327

旦那様は妻の私より幼馴染の方が大切なようです

第一章 嫁いだ先には旦那様の幼馴染が同居していました

「彼女はアンジェラ、私にとっては妹のようなものなんだ。妻となる君も、どうか彼女と仲良くしてほしい」

ラルフから彼の幼馴染を紹介されたのは、セシリアがガーランド侯爵家に嫁いできた当日のことだった。

ラルフの隣に座るふわふわした金髪の女性は、セシリアに向かって満面の笑みを向けてきた。

「初めまして、セシリアさん。貴方が嫁いできてくれて、私もとっても嬉しいわ。私は子供のころからこの屋敷に住んでいるから、分からないことがあったらなんでも聞いてちょうだいね」

「……初めまして、セシリアです。よろしくお願ひいたします」

「あら、そんなに緊張しなくてもいいのよ。私たちきつと上手くやっていけると思

うわ」

笑顔のアンジェラと、その隣で満足そうにうなづくラルフ。この状況はなんなのか。

セシリアは彼らの態度に言いようのない違和感を覚えながら、曖昧あまいな笑みを浮かべるのが精いっぱいだった。

その後ラルフと二人きりになったとき、セシリアは小声で問いかけた。

「——あの、失礼ですがアンジェラさんはラルフ様のご親族の方ですか？」

「いや、母の友人の娘なんだ。アンジェラが六歳のときに彼女のご両親が亡くなったから、うちで引き取るようになったんだよ。それ以来、私とアンジェラはこの家で兄妹のように育ったんだ」

「そうですか。それでアンジェラさんは今後もずっとこちらにいらっしゃるんですか？」

「なんだ、君はアンジェラを邪魔にするつもりなのか？」

ラルフはいかにも不快そうにセシリアを見据えた。婚約時代に二人で顔を合わせていたときには、一度も見せなかつた表情だ。

「いえ、そういうわけではありませんが、アンジェラさんはお義母様のご友人のお嬢様なんですよね？」

義母は結婚式が終わったら、義父と共に南の領地に居を移すことになっている。アン

ジエラが義母の縁者としてガーランド家に来たのなら、義母についていくのが筋ではないのか。

「母と一緒に南の領地に行こうと誘ったんだが、アンジエラはやっぱり住み慣れた屋敷から離れたくないと言ってね。私としても彼女がいるのはなにかと心強いし、君だって慣れない家でやっていくのに、アンジエラがいた方が安心だろう？」

「——はい」

笑顔で同意を求めるラルフに、セシリアは仕方なくうなずいた。

本音を言えば、安心なことなどにもなかつた。

確かにセシリアはガーランド家に来たばかりだし、女主人としてやっていくにあたって不慣れなことも多いだろう。

しかし家政の取り仕切り方は実家で一通り学んでいるし、この家特有のしきたりについては執事や女中頭にでも聞けばよい。なにも同年代の女性に教えてもらう必要などないのである。

むしろ「旦那様の幼馴染」という、客人とも親族ともつかない微妙な存在がいる方が、よほどやりづらいのだが。

（仕方ないわ。嫁いで早々に旦那様と喧嘩したくないし）

これはきつと一時的な措置なのだ。自分が女主人として家政を立派に取り仕切って見れば、アンジエラとていつまでも新婚夫婦の館に居座ることもないだろう。

セシリアはそう気持ちを切り替えて、結婚式に臨むことにした。



結婚式の身支度というのは、やはり心躍るものである。

実家からついてきた侍女に手伝ってもらいながら湯あみをし、この日のために用意されたウェディングドレスを身にまとい、髪を結い上げ、化粧を施し、先祖から伝わるアークセサリーを身に着ける。

「お嬢様、本当にお美しゅうございます」

侍女メアリーの声に促されるように姿見を見れば、そこには純白の花嫁となった自分の姿が映っていた。

（いよいよ私はラルフ・ガーランドの妻となるのね）

そう考えると、セシリアの胸にラルフと出会ってから今日までのことが蘇^{よみがえ}ってきた。ラルフとの婚約は家同士の政略によるもので、どちらかと言えばラルフの実家である

ガーランド侯爵家に益がある話だった。

セシリアの実家であるサザーランド伯爵家は、やり手当主の父のもとで領内に次々と産業を興し、王国屈指の豊かさを誇っている。

一方ラルフの実家であるガーランド侯爵家は古くから続く名門だが、方々に借金をこさえて没落寸前と噂されていた。

そこで双方と付き合いがある公爵家が、サザーランド家の長女であるセシリアをガーランド家の嫡男であるラルフに嫁がせることで、サザーランド家からガーランド家に援助をしてやれないかと持ち掛けてきたのである。

その公爵が言うことには、「娘を名門侯爵家に嫁がせることができるのだから、サザーランド家にとっても悪い話ではないだろう」ということだったが、セシリアの父にしてみれば、勢いのあるサザーランド家との繋がりが欲しい名門貴族は他にもいるし、あえて貧乏侯爵家と親類になるメリットはさほどなかった。

「仲介したレナード公爵の顔を立てる形で一応顔合わせは行うが、お前が嫌なら別に断つても構わないからな」

顔合わせの前に、セシリアは父親からそんな風に言われていた。

しかし実際に会ってみたところ、ラルフ輝くような金髪と澄んだ青い瞳の美青年であ

り、柔らかな物腰や優しい声音に、セシリアはあっさり恋に落ちてしまったのである。

家柄を鼻にかけるようなところは微塵もなく、「君みたい魅力的な人が、うちに来てくれたらさっと素敵だろうな」と微笑みかけるラルフに、セシリアは夢見心地で婚約を承諾し、二人は晴れて婚約者同士となった。

その後何度かデートを重ねたが、ラルフはいつも優しく紳士的で、エスコートの仕方や話題の選び方、どれ一つとっても「この人とならば幸せな家庭を築けるだろう」と思わせるに十分なものだった。

またセシリアが嫁ぐに際して、義父はラルフに爵位を譲って義母ともども南の領地に引つ込むことを約束しており、義父母との付き合いという煩わしさわづらと無縁でいられることも、セシリアを安心させていた。

嫁いだあとは優しい旦那様と二人で力を合わせ、新たなガーランド家の歴史を築いていくのだとばかり思っていた。

それなのに――

（まさかあんな人がいるなんて……）

ラルフからアンジェラについてなにつ聞かされていなかった。その事実がまたセシリアの不安を掻き立てる。

それでもここまでできてしまった以上、もはや後戻りする術すべはない。
 (大丈夫、きつと幸せになれるわ)

ラルフは自分を愛しているし、自分もラルフを愛している。だからきつと大丈夫だ。
 セシリアはそう思いたかった。

支度を終えたセシリアが控えの間に入ると、母が「まあセシリア、なんて美しいの」と感嘆の声を上げた。

「小さかったお前がこんなに大きくなるとはなあ」

いつもは冷静な経営者である父も、目に涙を浮かべている。

「よく似合ってるぞセシリア」

「お姉様、すごくお綺麗です!」

兄のリチャードと妹のエミリアが口々にセシリアの花嫁姿を賞賛し、集まった親族たちも皆、目を細めて祝福の言葉を口にした。

その中に懐かしい姿を見出し、セシリアは驚きの声を上げた。

「いらしてくださいださったんですか、アイザック兄様」

「ああ、やはり来るべきだと思ってるね。宰相閣下から特別休暇をもぎとってきたんだ」

叔父の次男であるアイザック・スタンレーは、王立大学を首席で卒業したあと、宰相

の補佐官として王宮で働いている。国王からも目をかけられており、いずれ適当な領地と爵位を賜たまって、宰相の地位を継ぐのではないかと言われているほどの、大変優秀な人物だ。

今日の結婚式には一応招待していたが、普段から多忙を極めている彼のこと、おそらく欠席だろうと半ば諦めていたのである。

「ありがとうございます。アイザック兄様」

「……どうか幸せになってくれ。そうでないと、私も君のことを諦めきれないからね」

「まあアイザック兄様だったら、王宮に勤めるうちにそんな軽口をおっしゃるようになりますでしたね」

セシリアが笑いながら言うと、アイザックはどこか切なげに微笑んだ。

セシリアが子供のころ、アイザックはよく一緒に遊んでくれる優しい兄のような存在だった。いや率直に言えば、実兄のリチャードよりもよほど兄らしかったとさえ言える。

リチャードがなにかにつけて「セシリアは探検についてくるなよ」「女はすぐ泣くから足手まといなんだ」などと意地悪なことを言うのに対し、アイザックはいつだって「僕はセシリアと一緒にの方が楽しいと思うな」とセシリアの味方をしてくれた。

セシリアが恐ろしい野犬に囲まれたときはすぐに駆け付けて追い払ってくれたし、足

をくじいて歩けないセシリアを負って連れ帰ってくれたこともある。外を駆けまわるのが大好きなおてんば少女だったセシリアに、読書の楽しみを教えてくれたのもアイザックである。

しかしお互い年ごろになってからはなんとなく距離ができてしまい、あまり話すこともなくなつた。たまに親族の集まりで顔を合わせても、アイザックはセシリアにはいつもよそよそしくて、艶めいた態度をとつたことなど一度もない。

今のはちよつとした冗談のつもりなのだろう。

「だけど冗談でもそんな風におっしゃっていただけるのは嬉しいですわ。私は『もしかしてアイザック兄様に嫌われているのかも?』って、ちよつと心配していましたのよ」

「それはとんでもない誤解だよ。セシリア、私は——」

「やあセシリア、見違えるようだよ」

そこに花婿姿のラルフと彼の両親、そしてなぜかアンジェラまでもが彼と一緒に現れた。

ラルフに寄り添うアンジェラの姿に、セシリアは思わず息を呑んだ。

アンジェラのドレスは純白で、ラルフの隣に並ぶとまるで彼女こそが今日の花嫁のようだった。

「とても綺麗だよ、セシリア」

花婿姿のラルフが微笑みながら賞賛の言葉を口にした。彼の隣には相変わらず純白の衣装をまとつたアンジェラがべったり張り付いている。

「……ありがとうございます。ラルフ様も素敵です」

セシリアは隣のアンジェラに違和感を覚えつつも、笑顔を作つて返答した。

「ごめんなさいね、白いドレスはやめるように伝えたのだけど」

横から義母が言い訳がましく囁いた。

セシリアがなんと返答したものと迷っていると、先にアンジェラが口をとがらせて反論してきた。

「あら、だって今日はラルフの特別な日だもの。一番気に入っているドレスを着てお祝いしたかったのよ。小母様だって以前このドレスはとても似合っているとおっしゃっていたじゃない」

「それはそうだけど」

「まあいいじゃないか。なにもこんな日に揉めなくてもさ。セシリアだって別に気にしていないよ。そうだろう?」

事もなげに言うラルフに、セシリアは曖昧な微笑を返すよりほかになかった。

その後、皆で屋敷にしている聖堂に移動し、いよいよ結婚式が始まった。父と共にバージンロードを歩み、祭壇の前で夫となるラルフに託される。讃美歌と神父による祈禱、そして誓約。全ては手順通りなめらかに行われた。

「新郎ラルフ、あなたはセシリアを妻とし、病めるときも健やかなるときも、愛をもつて互いに支えあうことを誓いますか？」

「誓います」

「新婦セシリア、あなたはラルフを夫とし、病めるときも健やかなるときも、愛をもつて互いに支えあうことを誓いますか？」

「誓います」

そして指輪の交換が行われてから、ラルフの手によって、花嫁のベールが取り除かれる。

すぐ目の前にあるラルフの温かな微笑みに、セシリアは胸の高鳴りを覚えた。

婚約期間にデートを重ねていたものの、彼と口づけを交わすのは、これが初めてのことである。

ゆっくりとラルフの唇が近づいてくるのを、セシリアは目を閉じて待ち受けた。

ところが触れ合う直前になって、参列者の一角で悲鳴が上がった。

「アンジェラ様！ 大丈夫ですか、アンジェラ様！」

その名を聞いた瞬間、ラルフはほとんど花嫁を突き飛ばすようにして、アンジェラのもとに駆け付けた。

倒れ伏しているアンジェラを、ラルフが両腕で抱き起こし、心配そうな声で呼びかけた。

「アンジェラ！ アンジェラ！ 大丈夫か？」

対するアンジェラはうつすらと目を開けて、ただ「ラルフ……」とか細い声で名を呼んだ。

「どうしたんだ？ 気分が悪いのか？」

「ええ、少し……」

「旦那様、アンジェラ様は体調を崩しておられるようです。すぐにお部屋にお連れしてください」

女性使用人の言葉に、ラルフは「分かった」とうなずいて、腕にアンジェラを抱いたまま、足早に聖堂を出ていった。先ほどの女性使用人があとに続き、残された者たちはただ顔を見合わせるよりほかになかった。

「……あの方はなにか持病でもおありなのですか？」



やがてセシリアの父がサザーランド一族を代表する形で、義父に向かって問いかけた。「いえ、持病というほどのものではないのですが。アンジェラは昔から身体が弱くて、よくああして貧血を起こしているのです」

「そうですか。なにか重いご病気というわけではないのですね」

「はい。今までいろんな医者に診せたのですが、なにかこれといった原因があるわけではないようです。成長と共に丈夫になるだろうと言われていたのですが、どうもなかなか良くなるようです」

「ええ、そうなんですの。可哀そうな子なのです」

義母が横から言い添える。

「ところで花婿のガーランド君はどうしたんでしょう。まだ戻ってこないようですが、従兄のアイザックがいぶかしげに口をはさんだ。

「え？ あの子はあるままだまアンジェラに付き添っているのだと思いますが」

「アンジェラ嬢に？」

「はい。なにしろ二人は兄妹同然に育ちましたからね。心配なのでしょう」

「そうですか。では我々は彼が戻ってくるまで、ここで待たねばならないということですね」

その言葉に、義父は一瞬虚を突かれたような表情を浮かべた。

「だって、もちろん結婚式を続けるのでしょうか？」

アイザックが重ねて言うと、義父は「え、ええもちろんですとも。このまま続行しますよ」と焦ったように口にした。

生死をさまよう重病ならばいざ知らず、しょせんはただの貧血である。しかも相手は花婿の血縁ですらない居候だ。両家が集まっつての大切な式を中断するような事態ではないことが、ようやく理解できたのだろう。

「お前、ラルフを呼びにやりなさい」

義父が義母に向かって言った。

「え、でも」

「マーサが付き添っているんだからいいじゃないか。いつまでも皆さんをお待たせするわけにもいかんだろう」

「……分かりました」

やがて義母に連れられて、ラルフが聖堂に戻ってきた。

そして改めて誓いの儀式が行われたが、彼は心ここにあらずといった様子で、すぐ前にいるセシリアの姿が目に映っていないようだった。

その後、場所を中庭に移して披露宴が始まった。披露宴は立食形式のガーデンパーティーで、客たちは自由にテーブルの間を歩き来しながら、歓談しつつ料理を楽しむ仕様になっている。

ラルフはしばらくの間セシリアと共に招待客の相手をしていたが、少し客が途切れたときにふいにセシリアに耳打ちした。

「ごめん、ちょっとだけ行ってくるよ」

「え？」

そしてラルフはセシリアに背を向けると、そそくさと館の方へと立ち去った。

（え、まさか私を置いていったの？ 披露宴の最中に？）

一人残されたセシリアが呆然と立ちすくんでいると、後ろから「やあセシリア嬢、本当になんて美しい花嫁姿だろうね」と陽気な声が響いてきた。

振り向くとでつぶり太った男性がにこやかな笑みを浮かべて立っている。ジョージ・レナード——セシリアとラルフを仲立ちしたレナード公爵その人だ。

「ありがとうございます、レナード様。ラルフ様は今ちょっと席を外しておりますの」セシリアがそう応じると、レナードは「ああもちろん、分かっていると」としたり顔でうなずいた。

「ラルフ君はアンジェラ嬢の様子を見に行ったんだろう？ あの二人は昔から本当に仲が良いからね」

「……レナード様は、アンジェラさんのことを以前からご存じだったのですか？」

「そりゃあね。ガーランド家とは家族ぐるみの付き合いだし、アンジェラ嬢のことは昔から良く知ってるよ。アンジェラ嬢は子供のころから天使のように可愛くてね。ラルフ君はいつもびったりあの子にくつついて、あれこれ世話を焼いていたもんだ」

「そうなのですか……」

「そうなのだよ。だけどあの二人はあくまでただの幼馴染だからね？ 花嫁さんはアンジェラ嬢にやきもちを焼いちゃあいけないよ？」

「ええ。もちろん分かっておりますわ」

セシリアはなんとか笑顔を作って返答した。

ラルフはとても優しいから、体調を崩した幼馴染を放っておけなかった、それだけだ。自分が嫉妬をしたり、不安に思ったりする理由など、ただの一つもありはしない。

セシリアはグラスを手にとると、もやもやした思いを葡萄酒ぶどう酒と共に飲み込んだ。

披露宴が終わる直前になって、ラルフはようやく戻ってきた。そしてセシリアと共に客人たちを見送った。

「じゃあな。ラルフ、あとのことは頼んだぞ」

「はい。お任せください父上」

「ラルフ、セシリアさんと仲良くね」

「はい。もちろんです母上」

南の領地に向かう義父母に対し、ラルフは力強く請け合った。

和やかなガーランド家に対し、セシリアの親族は皆どこか気づかわしげな様子だった。

「それじゃあセシリア、元気でね」

「はい、お母様」

「お姉様、絶対お手紙ちょうだいね」

「ええ、絶対書くわ。エミリア、貴方も手紙を書いてね」

セシリアが皆と別れを惜しんでいると、従兄のアイザックが意を決したように口を開いた。

「セシリア、もしなにか困ったことがあったらすぐに連絡をよこしてほしい。私は君のためならいつだって飛んでいくからね」

「まあ、ありがとうございます。アイザック兄様」

「そうだ、これを渡しておくよ」

アイザックがふと思いついたように、自分の指輪を外してセシリアに差し出した。
「あの、これは……?」

「あ、いや、別に変な意味じゃないんだ。ただこれは私の身分を表すものだから、これを王都や直轄領ちかつかうりょうの役所で見せれば、私の関係者だと証明できる。いざというときはこれを使って私を呼び出してほしい」

「そんな大切なもの、受け取れませんか」

「頼む、君に持っていてほしいんだ」

真剣な面持ちで懇願するアイザックに、セシリアは思わず苦笑した。

「分かりましたわ、アイザック兄様。これはお預かりいたします」

結婚式と披露宴の出来事で、アイザックにまで心配をかけてしまったらしい。

実際には王宮で忙しく働く彼を呼び出すなんてできるわけがないが、その気持ちが嬉しくて、セシリアは温かい気持ちに包まれた。

第二章 ガーランド邸の人々

やがて客人は全て引き上げて、今のこの屋敷にいるのは使用人を除けば、ラルフとセシリア、そしてアンジェラの三人きりになった。本来なら二人きりのはずだったが、今さらそれを考えたところで仕方がない。

ともあれセシリアの女主人としての毎日が、まさに今これから始まるのである。

(これから頑張らないといけないわね)

セシリアがそう決意を固めていると、ラルフが声をかけてきた。

「セシリア、披露宴では一人にして悪かったね」

「いえ……アンジェラさんの具合はいかがですか?」

「うん、大分良くなったみたいだよ。君にも心配をかけたね」

「いいえ、大したことがなくてようございました」

「ありがとう。これからよろしく頼むよ、セシリア」

「はい。こちらこそよろしくお願ひします、旦那様」

一生に一度の結婚式をめちやくちやにされたのは辛かったが、いつまでも引きずっていても仕方がない。いずれ「あのときはちよつとシヨックだったわ」なんて笑い話にできる日もくるだろう。

その後セシリアに主だった使用人たちが紹介された。

執事のジェームズは先代からガーランド家に仕えている白髪頭の老人で、「ようこそおいでくださいました。ガーランド家に新たな女主人をお迎えできることを、心からお慶び申し上げます」と懇慫に頭を下げた。少なくとも表向きはセシリアのことを歓迎している様子である。

一方女中頭のマーサはいかつい顔つきの中年女性だが、「初めまして。マーサと申します」と淡々とした口調で言うのみで、愛想笑いすら浮かべなかった。

(この人、確かアンジェラ様って叫んでいた人よね)

——アンジェラ様！ 大丈夫ですか、アンジェラ様！

誓いの儀式の最中に、悲鳴のような声でアンジェラの名を呼んでいた女性使用人に間違いない。

(あのときは随分感情豊かに見えたけど、こうしてみるとなんだか気難しい感じの人のね)

セシリアがとまどっていると、ラルフが「マーサはうちではジェームズの次に古株なんだ。私たちが子供のころは、良く二人でいたずらをしてはマーサに大目玉を食ったものだよ」と横から説明した。

「私たち？」

「私とアンジェラだよ」

「そんなこともございましたねえ」

それまで仏頂面だったマーサは、アンジェラの名を聞いた途端に相好を崩した。

「本当に旦那様とアンジェラ様は幼いころから仲が良く、いつも一緒に遊んでおられましたねえ。私も使用人は、お二人は本当にお似合いだつてよく噂していたものです。ですからよその伯爵家から奥様をお迎えになると聞いたとは、そりゃあもうびっぴりいたしました」

「はは、なにを言ってるんだいマーサ」

ラルフは事もなげに笑っているが、セシリアは上手く笑えなかった。マーサが自分に対して冷たい理由がなんとなく呑み込めたからである。

「ところでマーサ、セシリアは侍女を連れてきていないから、誰か適当な女性をつけてほしいんだ」

「まあ、サザーランド家から侍女を連れていらっしやらなかつたんですか」

侍女さえ連れてこれないのかと言わんばかりの口調に、セシリアは「ええ、そうよ。

お義父様の意向なの」と短く答えた。

セシリアとしては一人くらい気心の知れた使用人を連れてきたかったが、あまり外部の人間を入れたくないという義父の意向に従った結果である。

「分かりました。アンナをセシリア様におつけしましょう。とても気の利く子ですので、ちょうどいいかと思います」

マーサはしかつめらしくうなずいた。

そして紹介されたアンナは、どこかふてぶてしい顔つきをした若い女性だった。マーサによれば「とても気が利く子」とのことだが、セシリアに対してその気遣いを発揮してくれるかは心もとなく思われる。

——お嬢様、本当にお美しゆうございます。

セシリアは花嫁衣装を着るのを手伝ってくれたメアリーのことを思い出し、「せめてあの子にはここに残ってもらえば良かったかも」という後悔に襲われたが、今さら後の祭りである。

悲觀的になつても仕方がない。アンナとはこれから付き合っていくうちに、打ち解けることもあるだろう。

「よろしくね、アンナ」

セシリアはそう言って微笑みかけた。

アンナは「はい。よろしくお願いします」と言葉を返したが、顔に浮かぶ表情はどこか冷笑めいていた。

夜になり、セシリアは湯あみをして真新しい夜着に着替え、夫となった人の訪れを待ち受けた。

ところが深夜になつてもラルフはなかなか現れなかった。

(一体なにをしていらっしやるのかしら)

そしてセシリアがうとうととまどろみかけたとき、ようやく現れたラルフは、困り顔でとんでもないことを言い出した。

「すまないが、アンジェラの調子が悪いんだ。とても不安がつているから、もうしばらく

く彼女のもとについてあげることにするよ」

「アンジェラさんはそんなにお悪いのですか？ 今からでもお医者様を呼びにやりましょうか」

「いや、それには及ばないよ。アンジェラは昔から身体が弱くてね。すぐに体調を崩すんだ。いつものことだから、君はそのまま休んでしまっただけで構わないよ」

いつものことなら、なにもラルフが付き添うことはないのではないか。ガーランド侯爵家には世話をする人間なんていくらでもいる。

他の日ならばいざ知らず、今夜は新婚初夜なのだ。

無言になったセシリアに対し、ラルフは幼子に言い聞かせるような口調で言った。

「仕方がないだろう？ 家族が病気のときに、とてもそんなことをする気にはなれないよ」

「そんなこと、ですか」

「言葉尻を捕らえるのはやめてくれ」

「ですが――」

「君はアンジェラが心配じゃないのか？ 君には思いやりの心はないのかい？」

仇を見るような冷たい眼差し、とげとげしい声音に、身体がすぐむよ様な心地がする。

「……申し訳ありません」

思わずセシリアが謝罪すると、ラルフは打って変わった優しい声で「うん、分かってくれたらいいんだよ。私も少し言いすぎたね」と言って、セシリアの髪をそつと撫でた。

「アンジェラが落ち着いたらここに戻ってくるから、それまで待っていてもらえるだろうか」

「分かりました。お待ちしております」

「ああ。すまないね。……愛してるよセシリア」

ラルフはいつもデートのときに見せていた温かな日差しのような笑顔で言った。

「私も愛しております。旦那様」

「必ず戻ってくるから、待っていてくれ」

しかし夜が白々と明けるころになっても、ラルフは戻ってこなかった。



一夜明けて、セシリアはぼんやりとベッドの上に座り込んでいた。

窓の外ではすでに朝日が昇っており、小鳥たちのさえずる声が聞こえてくる。

結局ラルフはあのあと一度も帰ってこなかった。
 (アンジェラさんは一晩中離してくれなかったのね……)

もやもやとどす黒い感情が湧き上がってきそうになるのを、セシリアは必死で押し殺した。

身体が弱いのはアンジェラ本人の責任ではない。アンジェラを不快に思うのは筋違いだ。自分ももっと思いやりの心を持たねばならない。

セシリアが己にそう言い聞かせていると、ノックの音が室内に響いた。

「……どうぞ」

おそらく今ごろになってラルフが弁解に来たのだろう。セシリアは昨日の冷たい眼差しを思い出し、なんとか笑顔を作って彼の訪れを待ち受けた。

不機嫌な顔を見せてはラルフに嫌われてしまうだろう。なんとも思っていないふりをして、彼を優しく迎えなければ。

ところが入ってきたのはラルフではなく、昨日セシリア付きとして紹介された侍女のアンナだった。

「お早うございます。顔を洗う湯をお持ちしました」

アンナはにこりともせず淡々とした口調で言った。

そしてセシリアが顔を洗い終えるのを待ってから、「朝食はこのまま寝室でお召し上がりになりますか?」と問いかけた。

「旦那様はどうなさったのかしら」

「旦那様はすでに食堂で召し上がっておいです」

「え?」

「朝になってようやくアンジェラ様の体調が落ち着いて、朝食をおとりになれるのとどだったので、付き添っておられた旦那様もそのまま一緒に朝食を召し上がるとのことでした」

「なんですって……!」

セシリアは一瞬眩暈めまいがした。ラルフは戻れなかったことをセシリアに詫びに来るよりも、アンジェラと一緒に食事をとることを優先したのだ。

「それで、どうなさいますか? こちらに朝食をお運びしますか?」

「いいえ。私も食堂に行くわ。着替えるから手伝ってちょうだい」

「え、おいでになるんですか?」

アンナの声にはどこか不満そうな響きがあった。

「着替えるから手伝いなさい」

「……かしこまりました」

セシリアは身支度を整え、急ぎ足で食堂に向かった。

食堂が近づくにつれ、男女の楽しい声がセシリアの耳に響いてきた。

「うふふ、いやだラルフったら、そんな冗談ばかり言わないでちょうだい」

「いや冗談じゃないさ、私は本当にそう思ってるんだ」

食堂に入ると、声を上げて笑いあうラルフとアンジェラの姿が目に入った。二人は入ってきたセシリアに気づくと、それぞれ対照的な反応を示した。

「セシリアさん、お早う。昨日は邪魔をしましてごめんなさいね。もしかして、朝までずっと待っていたのかしら」

笑顔で声をかけてきたのはアンジェラである。アンジェラの頬は薔薇色で、とても半日臥ふせていた病人とは思えないほどに血色がよい。

「……すまないセシリア。食事が終わったら、君に詫びに行こうとは思ってたんだ」

一方のラルフはさすがに気まずそうな表情で、もごもごと言いつつおやいた。「そうですね。せめて朝食を召し上がる前に、一言私に声をかけていただけたらと思いました。昨日のこともありですけど、朝は旦那様と一緒にいただきたいと思っていたので」

「いや、君にも声をかけようとは思ってたんだ。だけどまだ眠っていたら悪いし、それに結婚式の翌朝は、花嫁は疲れているから寝室で朝食をとることが多いとマーサに聞いたものだからね」

結婚式の翌朝に花嫁が疲れているのは、初夜が行われた場合だろう。一晚放置した花嫁を朝食の席でも放置していい理由には全くならないだろうに、この人はなにを言っているのか。

「ねえ仲間外れみたいに感じたのなら申し訳なかったわ。どうか機嫌を直してちょうだい。私たちこれから三人で仲良くやっていかなきゃならないんだから。今から喧嘩なんかしたくないわ」

「そうだな。アンジェラの言う通りだ。セシリア、どうか機嫌を直してくれ。ほら、君も席について。うちの料理長のコンソメスープは絶品なんだよ」

二人の言葉に、セシリアはぐっと奥歯を噛みしめた。自分だって新婚早々喧嘩なんてしたくない。

（だけどこれから三人でってどういうこと？ アンジェラさんはこの先もずっと居座り続けるつもりなの？）

「なあセシリア、そんな風に立ったままでは給仕役が困ってしまうよ」

ラルフに促されて、セシリアが仕方なく席についた。言いたいことはたくさんあったが、使用人たちも見ている場で、女主人が感情的になつて諍いを起こすのは適切ではない。話し合うとしたら、ラルフと二人きりになつてからだろう。

やがてセシリアのもとにも料理が運ばれてきた。ラルフが言っていた通り、コンソメはなかなかの味だった。

「どうだい？」

「とても美味しいですわ」

「そうか、君の口に合つて良かったよ」

ラルフは安堵したように言うと、「このスープはアンジェラの好物なんだ」と付け加えた。

「そうなの。私が大好きだつて言つたら、マーサが料理長に言つて、毎日出してくれるようになったのよ」

アンジェラが得意げに言い添える。セシリアはなんだか急に味がしなくなったように感じていた。

その後、ラルフとアンジェラはセシリアが来る前に交わっていた会話の続きを始めた。

「そうよねえラルフ、私もあの態度はないって思つたわ」

「だろう？ だから私はあのとき支配人にはつきりこう言つてやつたんだ——」

二人は朝食の間中、いかにも楽しげに言葉を交わした。

セシリアが何度か会話に加わろうとしても、アンジェラが「オペラと言えば、あのとき一緒に行ったオペラを覚えてる？」「そうそう、ラルフつてばそういうところがあるのよね。ほらあのときも——」などとすぐに二人の思い出話に持ち込んでしまうため、セシリアはひたすら蚊帳の外に置かれ続けた。

それでいて時おり思い出したように、「もうラルフつたらそんなこと言つて、ほんとに意地悪なんだから。ねえセシリアさんもそう思うでしょ？」などと白々しく同意を求めてくるのが余計に疎外感を募らせる。

（まるで私は邪魔ものみたいね）

いかにも親密そうに会話を続ける二人と、時おり相槌を打つだけの自分。

これではまるでアンジェラとラルフこそがこの屋敷の主人夫妻で、セシリアは厄介者の居候のようだ。

——それにしても、彼らのこの距離感なんだろう。

食事中にも気軽にボディタッチを繰り返し、顔を近づけ、微笑みを交わす。

ラルフはアンジェラを「私にとつては妹のようなものなんだ」と言っていたが、実の兄妹でもここまで距離が近いのはありえないのではないか。

セシリアは実兄のリチャードとそれなりに良好な関係を築いているつもりだが、思春期を過ぎてからこんな風にべたべたしたことはない。

むしろ兄を相手にこんな風に振る舞うなんて、想像しただけでも気持ちが悪い。

この距離感は、兄妹というよりはむしろ――

セシリアは湧き上がってくる疑惑を抑えることができなかった。

砂を噛むような朝食が終わると、セシリアと一緒に庭を散歩しようとラルフを誘った。

「パーティで使われたお庭がとても美しかったので。ぜひ旦那様に案内していただきたいんです。昨日はお客様のお相手に追われて、ゆっくり拝見できませんでしたから」

「ああ、もちろん構わないよ。それじゃアンジェラも一緒に――」

「アンジェラさんは病み上がりなので、お部屋でお休みなつた方がいいんじゃないでしょうか」

「そうか、そうだな……」

「あら、私は平気よ？　一緒に行きましょう」

アンジェラがさかさず反論するも、ラルフは「いや、アンジェラは少し休んでいた方

がいいよ」と優しい眼差しで言った。

そしてようやく夫婦二人の時間が訪れた。

二人きりになると、ラルフは婚約時代と変わらない紳士ぶりを発揮した。

セシリアを気遣い、セシリアの歩調に合わせてゆったりと歩きながら、あの花はもうすぐ見ごろだとか、あの温室は祖父が作らせたとか、当時のエピソードを交えながらあれこれ解説してくれる。

ラルフのエスコートはとても心地よくて、セシリアはこの優しい空気を壊すことにためらいを覚えた。

いっそのままなにも知らぬふりをして、散歩を終えてしまおうか。

ふと、そんな考えが胸に浮かんだが、これ以上もやめた疑惑を抱え続けるのもやはり辛いものがある。

セシリアの迷いが断ち切られたのは、ラルフの「ああその薔薇はね、アンジェラが好きだから植えたんだよ」の一言だった。

「母は白いバラを植えるつもりだったんだが、アンジェラがどうしてもピンクがいいって言い張ってね。結局母が折れたんだよ。あの子のアンジェラは本当に――」

目を細めてアンジェラとの思い出を語るラルフの姿に、セシリアはついに意を決して

口を開いた。

「旦那様、その、アンジェラさんのことなのですけど」

「うん？　なんだい？」

「あの方は、もしかして旦那様の愛人なのですか？」

「……君は本気で言っているのか？」

地を這うような低い声に、セシリアは身をすくませた。

「よくもそんな汚らわしい……よくもそんな下衆なことを思いつくものだ！」

強い力でいきなり肩をつかまれて、思わず悲鳴が漏れそうになる。

「旦那様、痛いです」

「一体どこからそんな下衆な発想が出てきたんだ！　君自身が下衆な人間だから、そんな発想が出てくるのか？」

「痛いです、乱暴なことはやめてください！」

肩をつかんで揺すぶられながら、セシリアが抗議の声を上げると、ラルフはようやく手を放した。そして深々とため息をつくとき、冷たい眼差しでセシリアを見据えた。

「アンジェラはただの幼馴染だ。私にとっては妹のような存在だと最初に言っていたらどう？」

「ですが——」

「なんだ？」

かぶせるように問いかけられて一瞬ひるみそうになるも、セシリアはなんとか言葉をつづけた。

「ですがただの幼馴染にしては、あまりに距離が近すぎるように感じました」

「それは下衆の勘繰りというものだ。誓って言うが、私とアンジェラの間にはやましいことはなにもない。分かっているのか？　君はそういう色眼鏡で見ることで、私とアンジェラの両方を侮辱しているんだぞ？」

ラルフの声や表情は、理不尽な言いかけられて、心底憤慨している男性そのものだった。ラルフとアンジェラの間に、本当に肉體関係はないのかもしれない。

「……申し訳ありません、私の考えすぎだったようです」

「分かったのならいい。今後二度とそんな下品なことは口にしないでくれ。不愉快だ」

「ですが純粋な幼馴染だったとしても、やはり距離が近すぎるように感じました」

「じゃあどうしろと言うんだ？　もう二度とアンジェラと話すなど？　顔も見るといふつもりか？　……君がそこまで我が儘で独占欲の強い女だとは思わなかったよ」

ラルフは吐き捨てるような口調で言った。

「……君はそのまま一人で庭を散歩するといひ。私はこれで失礼するよ。しばらく君の顔を見たくない」

ラルフはそう言い捨てると、そのまま屋敷の方へと戻っていった。一人残されたセシリアは、唇を噛みしめて立ちつくすよりほかになかった。



部屋に戻ってからしばらくの間、セシリアはなにも手につかずにただ呆然と座り込んでいた。

ラルフが自分にぶつけた蔑みの言葉、冷たい嫌悪の眼差しが、セシリアの頭の中でぐるぐる回る。

(旦那様に対してあんなことを言ったのは、やっぱり間違いだっただのかしら)

少なくとも今までのラルフはセシリアのことを邪険じやけんに扱っていたわけではない。

あくまでアンジェラ優先ではあったが、セシリアに対してもそれなりに優しい態度をとっていたと思う。

だけど先ほどのやり取りで、その全ては失われてしまった。

愛するラルフに嫌われてしまった、その事実がセシリアに重くのしかかる。

こんなことならなにも言わなければ良かった。

ラルフがアンジェラと恋人のようにじゃれあっている様子も、見て見ぬふりでやり過ごせば良かった。

そんな思いがセシリアのうちに湧いてくる。

とはいえ食事のたびに疎外感を味わい、アンジェラの「セシリアさんもそう思うでしょ？」という言葉に相槌を打つ日々を思うと、それはそれで耐え難いように思われた。(私はどうすれば良かったのかしら。これからどうすればいいのかしら)

結論が出ないまま昼近くなって、侍女のアンナが「昼食はお部屋でとることになさいますか？」と聞いてきた。

セシリアは食堂に行くと言ったが、今の彼女には、あの二人と同居する気力は残っていないかった。

「……ええ、部屋でとることにするわ」

セシリアが答えると、アンナは満足げに笑ったように思われた。今朝のことも考え合わせれば、おそらく気のせいではないだろう。

(あの子はアンジェラの味方なのね)

憂鬱な気持ちで昼食を終えたあと、セシリアはつらつらと嫁いでからの出来事を思い返した。

ラルフは気づいていないようだが、アンジェラのセシリアに対する態度には明らかに悪意が感じられた。

それが恋愛感情によるものか、あるいは子供じみた独占欲なのかは分からないが、アンジェラにとってセシリアは自分とラルフとの世界を壊す無粋な闖入者なのだろう。

そして侍女のアンナはそんなアンジェラに肩入れしている。

アンジェラに肩入れと言えば、女中頭のマーサの存在も気にかかる。

結婚式のとき、ラルフにアンジェラを運ぶよう言ったのは他ならぬマーサだ。本来なら従僕に頼めば良いことを、よりによって花婿のラルフに頼むなんて、今考えると異常である。

そういえば朝食の際に「花嫁は寝室で朝食をとることが多い」とラルフに進言して、セシリアを放置する流れを後押ししたのもマーサだった。

女中頭のマーサは、女性使用人の元締めだと聞いている。アンナがあんな風なのは、おそらくマーサの影響によるものだろう。つまりマーサの影響下にある女性使用人は、全てアンジェラの味方である可能性が高い。

（私は女主人として、忠誠心が別のところにある使用人たちを扱っていかなければならぬのね……）

むろん家政の取り仕切りは女主人の権限であり、気に入らない使用人は辞めさせることも可能である。

とはいえ夫ラルフの後ろ盾のない身で、年季の入った女中頭とその一派に手を出すのはなかなか骨の折れる問題だ。

（もしかして男性使用人も？ 執事のジェームズはどうなのかしら）

セシリアは昨日紹介された老執事の様子を思い返した。

ジェームズはガーランド家の新たな女主人を心から歓迎する態度を示しており、会った限りでは好印象だったが、しかし――

物思いにふけるセシリアの耳に、ノックの音が響いてきた。

セシリアが返事をする、現れたのはラルフだった。彼は照れたような笑みを浮かべて「君と仲直りしようと思ってきたんだよ」と切り出した。

「あのあと一人になって色々と考えたんだ。それで嫁いだけばかりで神経質になっている君に対して、少し思いやりが足りなかったと気がついたんだよ」

（私がアンジェラさんを気にするのは、私が神経質なの原因だということでしょう）

うか)

「君にしてみれば、二人きりの新婚生活を夢見ていたところに他の女性がいるのだから、つい嫉妬してしまうのも無理はない。それで変な風に邪推したり、邪魔者扱いしたくなったりするのも仕方がないのかもしれない。……だけどセシリア、これだけは分かってほしい。少なくともアンジェラの方は、心から君と仲良くすることを望んでいるんだ」

（食堂での態度はどう見たってそんな風ではありませんでした。いいえ、もしかしたら結婚式の最中倒れたことや、その後ずっと体調不良を訴えたのだから、わざとなのかもしれない）

「恵まれた君にはまるで想像もつかないだろうが、アンジェラは子供のころから身体が弱いせいで、私の他には遊び友達もいなかったんだ」

（それは身体が弱いせいではなく、アンジェラさんが貴方と二人きりで過ごすことを望んだからではないでしょうか）

「だから彼女は君が屋敷に来ることをそれは楽しみにしていたんだよ。君もアンジェラのそういう健気な思いを、ほんの少しだけでもいいから汲んでやってほしい。そしてどうかアンジェラを邪険にしないで、家族として受け入れてやってほしいんだ」

（邪険にされているのは私の方です）

「なあセシリア、私にとつては君もアンジェラも同じくらいに大切なんだよ。婚約時代の君はいつも優しく、誰に対しても親切だった。そんな君ならきつとアンジェラとも仲良くやってくれると信じていたし、今だつて信じたいと思っっているんだ」

（私は貴方の妻になるためにガランド家に来たのです。アンジェラさんのお友達になるためではありません）

ラルフに対して反論したいことは山ほどあった。

しかしセシリアは全てを無言のうちに呑み込んだ。ここでなにか言ったところで、まともラルフを激高させるだけだろう。

「セシリア、私たちにはまだ時間が足りない。これからゆっくりと夫婦になつていくように」

「はい」

最後の言葉だけは、心から同意できることだった。

食事のときに疎外感を味わったのは、まだ自分とラルフの間に積み重ねた時間が足りないからだ。これからラルフといろんな経験を重ねて二人の思い出を作っていけば、自分一人が蚊帳の外に置かれることもなくなるだろう。アンジェラのことではできるだけ気

にしないことにして、ラルフと良い夫婦になるために、自分なりにできるだけのことをしてみよう。

セシリアはそう決意した。それは夫であるラルフを愛していたから。いや少なくとも愛していると思っていたからこそである。

ところがあるおぞましい事件をきっかけにして、セシリアはラルフに対する愛情をすっかり失ってしまうことになる。

第三章 ガーランド家の女主人として

翌日。気持ち切り替えたセシリアは、執事のジェームズに屋敷内を案内するように申し付けた。

貴族の妻にとって最も重要な仕事は家のために跡取りを産むことだが、次いで重要なのは家政の取り仕切りと貴婦人としての社交である。そして家政を取り仕切るには、まず屋敷について把握しておく必要がある。

ジェームズはさすがに心得たもので、あれこれ解説を交えながら、屋敷の主要な部分を手際よく案内してくれた。

当主の使う執務室に書斎、大広間、客間、サンルーム、家族共用の図書室、音楽室、美術室、撞球室（トウキウキウ）、ラルフも幼いころを過ごしたという子供部屋、裁縫室、厨房から地下のワインセラーに至るまで、ガーランド邸は伝統ある名門侯爵家だけあって、その作りは重厚で、それは見事なものだった。

「いかがでしょう、ガーランド邸は」